

「History of the United States, Volume 2」「American Voice」である。いずれも内容の一部で、歴史上の日本をアメリカとの関係から紹介している。

内容的には、中立で事実としていくつかの事象を扱っている。また、この中立性は子どもたちの多面的な視野を育てる討論スキル紹介部分にもはっきりと表れている。「American Voice」から、例を示す。

私たちが、日系人博物館で出会った「日系人収容」についての記述の一部は「人種差別」「反アジアのグループ」「偏執的」などの言葉を遣って、収容の事実を伝えている。

また、原爆の日本投下については、賛成論が多数を占めると言われるアメリカの中で「賛成論旨」「反対論旨」と二つの見方をはっきりと示している。



Racism forced Japanese Americans into internment camps.
Racial prejudice against Japanese Americans was deeply rooted in the United States long before the Japanese attack of Pearl Harbor. Some West Coast farmers resented Japanese

(2) 小学校の教科書

私たちが訪問したバトルクリーク小学校の Ms.Sylvia が使っ



ている社会科の教科書である。多民族国家のアメリカらしく「いろいろな文化があるけれど、みんななかよく生活しましょう」をテーマにした学習の中で日本の文化として「正月」を、厚さ3cmの本の中で、2ページ分紹介している。



2 教科書の採用と運用

教科書の中には、前述のように日本についての記述があるわけだが、実際にその教科書が採用され、授業の中で使われるかどうかは別問題である。これは、Mr.Corgan の講義にあったアメリカの教育システムとも絡み合って、前述の Ms.Sylvia (写真) への以下のインタビュー内容にまとめることができる。彼女は小学校3年の担任であるためここに記述する内容は小学校の話が中心となるが、中学、高校でも似た現状であるとのことだ。



小学校では教育プログラムを学校ごとに決める。最低限の内容については国からの指定があるが、特に彼女の勤務する学校などでは、特色を出すことが多い。

採用する教科書は、地域にある independent な教員組織で内容を吟味し、候補をあげ、最終的に学校が決定する。実際は授業者である教員が決めるわけである。国際理解的な内容は社会科で担当するが、社会科の教科書を販売する会社は、特に小学校用では地域色を強く出してくる。その方が、子どもたちにとって身近で興味がわくため、教員側が使いやすく、採用が増えるからである。その分、外国理解、日本理解のための内容は、非常に少なくなってくる。

また、運用も当然授業者に任せられる。Ms.Sylvia の場合、日本のことを扱うのは広島原爆投下による一日本少女の死を扱ったものだけだという。これは文化・歴史の紹介ではなく、反戦の心情育成である。親日家の彼女の言であるが、我々がわかったのはここまでである。もっと多くの情報が得られなかったことが、非常に残念なことである。

(小島 克視)